

小粥正巳氏（元大平蔵相秘書官）に聞く

# 健全財政へのこだわり

―聞き手・阿部 穆



プエルトリコ・サンファンでの第2回先進7カ国首脳会議（サミット）に出席し、宿舎でくつろぐ大平外相。その右が小粥正巳秘書官、左端は森田一秘書官、右端は内海孚国際金融局国際機構課長（1976年6月27日～28日）

思いもかけぬ「蔵相秘書官」拜命

——大平さんが大蔵大臣に就任されたのは、昭和四九年（一九七四年）の七月です。田中（角栄）内閣で福田（赳夫）蔵相が辞めて、その後を引き継がれた。それで次の三木（武夫）内閣でも再任されまして三木内閣の最後までやるわけですね。小粥さんは、その最初から最後まで蔵相秘書官をおつとめになったわけですが、それまでに小粥さんは大平さんどこかで接点があったのですか。

小粥 いいえまったくありませんでした。秘書官の内示を受けた時は、私が東京国税局の間税部長という仕事に出ていた時でしたが、私は三一年に大蔵省に入者しましたので、四九年といいますと十年目ですから、大体、年頃からいうと本省へ帰って、一番軽い課長ポストを仰せつかるといいうくらの頃でした。なお後から考えると偶然なんです、東京国税局間税部長というのは、大平さんが池田勇人さん（東京財務局長）から請われて就かれたポストなんです。税の仕事としては大平さんは、最初に横浜の税務署長をやられて、それから仙台税務監督局の間税部長になったのですが、そこで「どぶろく退治」に関して、権力者と治められる側との関係についての、大平さんらしい考え方を後に披瀝されています。

——その「どぶろく退治」の話というのを少しご説明下さいませんか。

小粥 間税部の仕事というのは、酒税を含む間接税全般を扱うのですが、当時、その仕事の大半は、農村における「どぶろく」の密造を取り締まることでした。それはきちんと税金を払わなければ酒を造ってはいけな、という税法上の建前があったからです。ところが「どぶろく」というのはもち米

に麹を混ぜれば簡単にできるものだそうで、農村ではあちこちで造っている。それを税務当局が密造酒として摘発して、何がしかの罰金をとり、始末書をとって取締る。一種の警察的な仕事をするわけですね。しかし、密造酒というと何か非常に悪いことのようにだけでも、当時の東北農民からすれば、自分で飲むだけの分を造るのが、そんなに悪いことですか、ということになる。そこに、大平さんの痛みがあつて、税金を取る側と取られる側、その両方の立場をじっくり考えて見ようという大平さんの、いわゆる楕円形の思想を、そこに見ることができません。

——なるほど。それで最初の質問に戻りますと……。

小粥 私も大平さんが、大蔵省の先輩であるということとは、知っていましたし、新聞で顔写真は見しておりましたが、大平さんに直接お会いしたことはないし、ましてお話したことなどありません。それで「これはエライことになった」と思いました。私はもちろん秘書官の経験もありませんでしたし、自分ではとてもそんな仕事に適しているとは思えないので、内示の直後、大蔵省の先輩に挨拶に行きましたときに、「私でも勤まるでしょうか」と聞いて見ましたら、「大平さんという人はいい人だから、とにかく誠心誠意仕えれば、こわいことないよ」と励まされました。それから秘書官の経験のある別な先輩には「秘書官をやるんなら大物の秘書官のほうがいいよ」と言われましたが、私はその意味がよくわかりませんでした。つまり大平さんが大物という認識もなく、まったくの政治オンチでした。しかし、とにかく外務大臣をやった方が大蔵大臣になられたんですから、重要人物に違いないとは思いますが、「あの人は大派閥の領袖で、政治家として大物なんだよ」「ああ、そうなんですか」という、その程度の認識でした。

実 — その時に、大平さんは図らずも大蔵大臣を引き受けるわけですが、大蔵省を退官されたのが昭和二十七年ですから、二二年ぶりくらいで大蔵省へ戻ってくることになったわけですね。(大平さんは)華 「まさか俺がここに帰ってくるとは、この主人公になるとは思ってなかったよ」というようなことを、しきりに私たちに申されておったですね。それで、ご本人は、その時どんなふうな感じだったのですか。

### 「図らずも」貧乏くじを引いた蔵相就任

小粥 大平さんがその時おっしゃった言葉は、決して韜晦ではなくて本心でもあったと思います。つまり大蔵大臣というのは、ある意味ではたいへん晴れがましいポストでもある。自分がそこへ、古巣である大蔵省へ大臣として戻ってきた。それは、たまたま福田さんが辞めたというハプニングによるもので、後任適格者はいろいろな意味でもう大平さんしかいなかったという政治的な状況があったのでしようけれども、大平さんとしては「まさか 思いがけず」というのは、まさに「図らずも」であり、その時の実感は、お言葉どおりであつたでしょう。それから時期がたいへん悪い時期でしたね。昭和四九年の七月は、第一次石油ショックの最中で、物価が高騰する一方、企業の収益が急速に悪くなって、税収が激減していました。この事態に対処するため大平さんは苦勞を重ねた挙句、結局二年目にはご自分のもつとも嫌いな赤字財政を運営せざるを得なくなりました。「えらい時期に引き受けた」というのは、まさに本心だつたでしょう。

ところで大平さんが政界にいられて間もない昭和二八年頃に書かれた『財政つれづれ草』の中で、大蔵大臣の職について論じたものに、「世の中に貧乏くじを引くという言葉があるが、まさにこれは大蔵大臣にあつらえ向きの言葉である。（中略）誰も自ら進んで引きつけてよいような生易しい仕事ではない。出来得べくんばお断わりしたいポストであろう。また進んでやってみたいという人にはやってもらいたくない仕事（ポスト）であり、どうしてもいやだという人こそ、三顧の礼をもってこの公職に迎えないければならない重職であるといえよう。」と記しておられます。これは私と富沢宏秘書官が書きました「大平総理の財政思想」に引用したもので、「当時、予想しておられたかどうか、後年、御自身がまさにこの通りの立場に置かれることとなった。」とも書いておられるとおりです。まったくこれは、当時の大平蔵相の心境を如実に表現していると思えますね。

——それから「樺櫨論」というのがありますが、それはどういふものですか。

小粥 これも大平さんがその『財政つれづれ草』に書かれたものですが、「櫨の木の養分が足りないとときは、枝葉を切り落として樺櫨にしないと櫨の木は枯れてしまう。財政の困難に対してもこれと同じ様に不要の歳出（枝葉）を切り落とすことが大事だという趣旨である。『入るを計って出るを制す』が、大平総理の財政についての基本的なお考えであつたように思う。」と「大平総理の財政思想」に書いた次第です。大平さんの財政についての基本的な考え方というのは、赤字財政を排した健全財政ですし、したがって大きな政府はとるべきでなく、できるだけ小さな政府をめざすべしとされました。これは徹底しておられましたね。

——オイルショックの後、日本の経済は塗炭の苦しみを味わっているわけで、財政も逼迫しておる

し、いろいろ借り換え勘定その他、毎日毎日やらなければならぬことが沢山あったと思うのですが、側で見ておられて（大平さんは）どんな感じだったですか。

### 福田・大平両雄の経済思想の対立

小粥 私がお仕えた二年半の間を通じて、大蔵大臣としての仕事は、おそらく楽しいことは一つもなかったといってよいほど厳しい環境でした。すべて苦しみだったと思います。まさにおっしゃったような客観情勢でしたし、特に三木内閣になりますと、福田さんが副総理兼経済企画庁長官として、自ら「全治三年」と称した日本経済の火消しと、立て直しのために乗りこんでこられました。事実、激しいインフレを抑え込んで経済を立て直しを図るため、いかにも福田さんらしい働きぶりを示されたわけですが、経済政策というのは当然、財政政策と重なり合うわけですね。福田さんは大蔵省でも大平さんより先輩であり、かつ自ら経済政策のリーダーという自負もあり、また、そういうことで内閣に迎えられるてきたわけですから、お二人の関係はなかなか難しかったと思います。

福田さんと大平さんは、財政とか経済政策についての考え方が、当時の危機的な状況下ですから、基本的に物価（上昇）を抑えなければいけない、経済を立て直さなければいけない、という点では同じなんですけれども、具体的な手法においてはやはり当然、違ってきますよね。それで、福田さんは大平大蔵大臣の前任者であり、もちろん政治的な立場も違う。ですから、私などは政治オンチですから、傍から見ていて分らないことが多かったんですけど、やっぱり振り返ってみればそのことについ

て、関係者が書いておられるように、両雄の間で時に摩擦が生じるといことは、当然あったと思います。福田さんが経済関係閣僚会議の主宰者ですから、どうしても財政運営についてもいろいろ注文をつける、大平さんが極めてにがい顔をしている。そういう局面が秘書官（の私）から見ても、ずいぶんあったと思います。お二人とも偉い大蔵省の大先輩ですけれど、やっぱり肌合い、物の考え方、あるいは経済、財政についての手法の違いは歴然としていましたね。

—— 田中内閣の終わりの頃というのは、半年ぐらいですか、ある意味ではたいへんばたばたしたような恰好で過ぎていくわけですね。そして、椎名（悦三郎）裁定があつて三木内閣になるわけですが、その頃、大蔵大臣としての大平正芳と政治家・大平正芳とは、行ったり来たりしているわけですが、ども、秘書官として側におられて、どんなふうな感じでしたか。

小粥 ああの頃は、時間配分で言えば大蔵大臣でありながら、否応なしにもう半分以上、政治家としての動きをされていたと思います。そこは、もっぱら森田（一）政務秘書官が付いているわけですから、事務の秘書官は、その間は割合、暇だったですよ。それで、ああいう経緯ですから、われわれは三木内閣で大蔵大臣を引き続きなされるということはないのじゃないか、と何となく思っていたのですが、結局、再任されました。その時に森田秘書官が、「再任を乞われて断る理由はないですからね」というような解説を加えたので、「ああ、そういうものなのかなあ」と、その辺の事情にうとかった私は、それなりに納得したことを覚えています。

それにしても、秘書官の私はかなり大臣の身近にあり、時にはロッシ風の借家（森村邸）の二階に上がり込んで政治記者の皆さんと一緒に朝食を頂いたりしていたので、大平さんの素顔がわかるので

実すが、どう考えても椎名裁定というのは、政治家・大平さんにとっては愉快なはずは全くなかった。就ども大平さんが、あの重要な数人の政治家のやり取りの中で、ちょっと外されて、事が決められてしまったみたいなことだったらしいですね。何となく、そういうことは門前の小僧でわかりますから、華「大臣、さぞかしご機嫌が悪いだろうな」と思っていたところが、そういう時でも周囲の人に何かで去「当り散らすようなことは、およそなかったですね。」「やっぱり出来た人というのは、こういうものか

なあ」と感心しました。二年半の秘書官生活を振り返ってみても、申しわけないくらい伸び伸び仕事  
ができました。秘書官として実に仕えやすい人でしたね。後で考えてみれば大平さんは、郷里の大先  
輩の津島（寿一）さんの秘書官を二度にわたってつとめられた上、さらに池田（勇人）さんの秘書官  
も二度やられており、まさに秘書官の大先達ですよ。秘書官としてのノウハウを全部、心得ておら  
れるわけですから、気のきかない私などは「見ちゃおられん、何をやっておるか」と何度怒られても、  
ちっとも不思議はなかったわけですが、およそそういうことはありませんでした。まあ諦めておられ  
たのかも知れませんが、やっぱり大人物だったと思います。

——話しを元に戻しますと、三木内閣ができて、経済総理ということで福田さんが采配を振るわれ  
るわけですね。そこで一番、問題になったのは、公共料金の扱いであったと思います。その時に、  
大平大蔵大臣は、ある程度の受益者負担ということを言われ、福田さんは公共料金の抑制ということ  
を言われて、その調整に非常に苦労されたわけですが、大平さんの主張が通ったものもあるし、まっ  
たく通らなかつたものもあるわけですね。あれはどうだったのですか。

## 酒・タバコ増税法案の苦闘

小粥 大平さんの主張がある程度、通ったのは、何といつても酒、タバコの値上げですね。これが多分、一大きな問題だったと思います。他は、大体、米価をはじめとして押えこまれたケースがむしろ多かったですね。結局、一般の公共料金については、主として抑制という福田さんの、主張が通った。ただし、大平さんは財政担当大臣として、野党の反対が非常に強い酒、タバコの値上げ つまり増税 をたいへん苦勞をされた上で実現しました。何しろ最初、提出した値上げ法案は、国会でもさんざん難航した挙句、延長国会の最終日に、河野（謙三）参議院議長が選挙制度の改正法案を先行させた後、時間切れで流れてしまうのですよ。七月四日の真夜中の三時ギリギリまで、酒・タバコ法案だつて選挙制度と同様に、可否同数でも議長採決で何とか成立させてもらえるものと、われわれは最後まで期待していたんですが、結局、河野議長の七分三分で野党に配慮するという議長哲学のために流れてしまったのです。担当大臣の大平さんとしては、まことに、残念極まりないことでした。文字通り、儼然とされて真夜中の国会から、すぐに宏池会の総会に行かれてその状況を報告されたことを覚えています。なおその時、大蔵省の松川道哉官房長と中橋敬次郎主税局長に対し「君たちの小さな心を痛めたなあ」と声を掛けられた話を後に官房長から聞かされたことがあります。

—— 逆に三木総理ならびにその周辺は、選挙制度の二法案が通つたので、喜んでいましたね。——  
小粥 それに対して、大平さんは、国民に不人気な酒、タバコの増税を、誰も好き好んでやるものじゃないけれども、どうしてもやむをえない時には敢えてやらなければならぬのがステーツマンで

実  
華  
去  
就  
情  
法  
に  
で  
去  
は  
情  
案  
成  
開  
き  
け  
い  
と  
大

はないか、と主張されたのだと思いますが、その思いを敢えて口に出さないうで、懔然とした表情で、文字通り耐えがたきを耐えておられました。こうして一度廃案になったその酒・タバコ値上げ法案は、もう一度、その年の一〇月の臨時国会に提出され、最後は強行採決までしてようやく一二月に成立したのです。たまたまその国会審議の最中、ちょうど第一回サミットがパリ郊外のランブイエで開催されることになりました。当然大平さんも大蔵大臣として出席しなければなりません。このとき私がお供したんですが、何と往復の飛行機に乗っている時間とサミット会場での滞在時間（前半だけ出席）がほとんど同じというひどいスケジュールでした。何故かという、大蔵大臣が帰ってこない、野党が酒・タバコ法案の審議をやってくれないというからです。そういう無茶な強行軍を大平大臣にお願ひして、やっとのこと酒・タバコ法案が成立したという次第でした。

しかし、酒・タバコの増税は辛うじてできたけれども、一般の公共料金上げは抑制され、さらに不況のために税収の落込みは厳しく、財政はいよいよ悪化して、結局、五〇年度の補正予算で戦後初めて実質的な赤字公債を発行せざるを得なくなってしまう。このことは、誰よりも健全財政を追求してきた大平さんにとっては、本当に不運なめぐり合わせであり、不本意極まることだと思っています。

——まあ、今日の財政を見ますと、あの程度の赤字公債でと思えますが、当時としてはたいへんなことだったのですね。それでアメリカ力をはじめとして、外国の中には日本が赤字公債に踏み切ってくれたから、世界経済の混乱もあの程度で済んだ、日本は良くやってくれた、と評価をする向きも当時があったと……。しかし、国内としてはたいへんだった。

小粥 それは多分あったと思いますが、ただ、そこはなかなか難しいところです。国内としては景気が悪いものですから、政府が何とかしてくれなきゃ、この景気はとも回復しない、そこでもし、大平さんの本来の考え方どおりに、税収が入らないんだから、支出を抑えるよりしょうがない、さっきの樺楳経済論はまさにそうなのですが、そう言っていたんでは、たしかにその時の当面の景気回復にはならないわけですね。経済を縮小させてしまうわけですから。もちろん大平さんは硬直的な考え方の人ではありませんから、日本経済を救うためにはここはやむを得ないと決断され、結果として、大平さんがもつともやりたくなかった赤字公債を出して、つまりそれは国民からの借金ですよ、それでカネをつくって公共投資に廻すなり、他の支出に当てた。その結果、第一次石油ショック後の急激な物価上昇を何とか抑えながら、景気のある程度回復させることができたわけです。

ですから五一年一二月に三木内閣総辞職に伴い、大平さんが大蔵大臣を辞任された時の記者会見で、「赤字公債をあなたの時代にたくさん出したのを、どう考えるか」という質問に対して、「この転換期にあつては、こうするより選択の余地はなかった」と、きっぱり答えておられます。その後も「まさにあれしかない。そういう意味では、自分は決してそのことを何時までもよくよしていることはない、あれはその当時、正しい選択であつた。あれしかなかった。」ということは一縷り返し言っておられたと思います。

——しかし、そうは言われたわけですが、大平内閣の時に一般消費税が出てきますよね。この時、小粥さんは主計局にいたのですか。

## 赤字公債脱却への責任感と「一般消費税」提唱

小粥 大平内閣が発足した時は、私は主計局で運輸郵政担当の主計官をやっていました。

——しかし直接の関わりはなかったかも知れませんが、(大平さんは)一般消費税という国民にとつてはあんまり歓迎されざるものを掲げて、五四年の一〇月に総選挙をやるうとしたわけですよ。それで途中で引つ込めるのですが、結果的には自民党は負けるわけですよ。しかし「何でそんな選挙に不人気なものを出すんだ」という声が自民党の中からも、派閥(宏池会)の中からも出ていたにも拘らず、大平さんが出そうとするわけですね。あれはやっぱり、大平さんの心の底というか頭の中に、赤字公債というものがよろしくない、何とかして均衡財政に戻さなきゃいかん、というものがあつたんじゃないですかね。

小粥 それは、お尋ねの通りです。財政家としての大平さんの頭に、大蔵大臣辞任後、最大の宿題として残ったのは、止むを得ず決断せざるを得なかつた赤字財政の処理ということだつたと思います。その赤字財政が、いよいよ大平さんが総理を受けられた時まで続いているわけですね。この宿題解決のメドは何とか自分の政権でつけておきたい、というのが大平総理の決意だつたに違いありません。ところでこの赤字国債は、財政法上原則は禁止されている特例公債でありますから、一般の国債は六〇年で償還することになっているのに、大平蔵相が自分からこれは一〇年間で償還するということが言われた。それから、特例公債法案という財政法の特例法案を五〇年度の補正予算の時に国会に提出したわけですが、それを赤字国債の発行が続く間は、わざわざ毎年提出することにした。実は法律の

つくり方によっては、必ずしも毎年、出さなくてもやれないことはないのですが、それを取って毎年、提出して、国会の審議を受けることにした。これも、大平さんが特に指示されたことです。つまり例外的に赤字公債を出すのだから、そのつど国会の批判を浴び苦勞をしながら認めていただく、なるべく速やかに健全財政に立ち戻ります、ということではなければいけないという、これが財政家大平さんの基本的な考え方であったと思います。

しかしその後、なかなかそこから脱却できないのが実態でしたから、いよいよ自分が総理になって国政全般に責任を負うことになったこの時こそ、財政については何としても赤字公債脱却の道筋をつけておきたい、という思いが強まったと思うのです。そこで具体的な政策の打ち出しとしては、三木内閣以来、社会保障関係費が非常に増えてきていましたから、それを含めて財政構造全般を見直して、支出をできるだけ切らなげやいけないということを、まず言われた。それから税については、課税の公平という立場から、極力、不公平税制の是正をして税収の確保を図らなければいけないと言われた。しかし、それでもなおかつ、どうしても足りない場合には、これはやはり国民の理解を得ながら増税をお願いしなげやならない、ということをして、いろいろな表現で、繰り返し訴えられました。では、どうしても仕様がないうとして、お願いする増税の内容は何かというと、それは従来のような所得税、法人税中心の税制ではなくて、支出に応じて税を払ってもらう一般消費税の導入が、税制構造、税のバランスから言って望ましいんだ、ということを主張されたのです。

—— 一般消費税については、大蔵省自体も検討していたのではないですか。

小粥 実は大蔵省は、ずいぶん以前から将来の租税構造としては、どうしても一般消費税 三〇

ロツパではすでに付価値税という名称で実施されてきました。を導入すべきじゃないかということとを勉強してましたし、政府の税制調査会でもその方向の答申が出ていましたが、大平内閣の最重要政策として掲げられた「財政の対応力の回復　その手段として一般消費税の導入」は、決して大蔵省が大平さんを説得して、そうしたんじゃないくて、大平さんの本来の考え方から必然的に出てきたんだと思います。まず国の財政のあり方として、「入るを圖つて出ざるを制す」にしたがって考えると、現状は入ってくるものより出るほうが圧倒的に多い赤字財政だから、それを何とかして直さなければいけない。しかし、出るものをどう切りつめる工夫努力をしても、どうしてもこれだけ不足だとなったら、それじゃ入るほう、つまり税収のほうを何とか考えて行かなければならない。しかし所得税、法人税を増税するというだけでは経済活力を殺ぐことになるし、税制全体のバランスから考えても間接税の増税しかないだろう。それを何とか国民に分かっていたらいて実現しなければならぬ。難しいことを承知でそれをやるのが、自分に課せられた使命だというのが大平総理の結論だったということでしょう。

ただし、不人気は当然のことだ。だけどそれは、根気よく説明をして国民に分かってもらう、それが政治なのだ、それを敢えてやるのが真のステーツマンだ、というまったく大平さん本来の真摯な、ある意味では愚直な考え方から出てきた。そして国民は最後には必ず分かってくれる、という民意の賢明さに対する信頼が、大平さんには強くあつたと思います。しかし、これは政治的な戦術から考えたらずいぶん危険であり、特に選挙前には決してとるべきでないということでしょう、だから党内は殆どみんな反対しますよね。そうであればいよいよ自分がやらなくて誰がやると、一層そう考えるよ

うになった。まして、総理という国政の最高責任者としたら、国民にもっとも不人気なことでも、自分の責任でお願いしなけりやならない、ということではなかったでしようか。

——それは何でしようか。さっきおっしゃったように、大蔵省の先達であられる津島さんはじめ、錚々たる先輩の下で薫陶を受けたからということなのか。それとも大平さん自身のフィロソフィー（哲学）といえますかね、何かがあつたからなんでしょうかね。

### 大平哲学から生れた健全財政主義

小粥 私は後者のほうだと思いますね。もちろん大平さんがある年齢まで大蔵省で仕事をされた。それから池田さんはじめ大蔵省の先輩にいろいろ教えられた、その影響は当然あつたと思いますが、それ以上に若い時から大平さんの頭に次第に形成されていった、やっぱり経済というものは、今風に言えば市場活力だけど、要するに民間が主体で、経済の活力がまずあつて、それで政府はそれを支援するのはいいけれども、決して余分に介入してはいけないんだ。政府の役割は、あんまり大きくなつてはいけないと。それから税というのは、さっきの「どぶろく論」の例にもありますように、やっぱり権力で税を取るといふことは、たいへんなことなんだ、したがって政治家にとつても、まず国民から取り上げる時の、国民の痛みというものを良くわきまえなければいけないんだという思いが、税の仕事がされた経験から、税の技術的な問題よりも、そういうことに大平さんの考え方は受け止め方が進んで行ったのだと思います。その上で財政を健全に運営するために、どうしても止むを得な

去 華 就 実  
い場合には、正面から情理を尽して国民に理解してもらわなければいけないという思いが、だんだんと経済思想あるいは政治哲学として、大平さんの中で熟成されてきたんじゃないかと思うんですね。

ですから、個人の生活としても、まず金を借りて、たくさん物を買って、先行きのことはともかく取り敢えずは結構な生活をするというのは、もつとも卑しむべきことだ、という考えでしょう。ご自分でも「俺はケチなんだ」とよく半分、冗談に、半分、本気で言っておられた、その儉約思想も基本的には相通ずるものがあるに違いない。分不相応なことをすべきではない。それは国だって同じことだということですね。

——池田さんの場合は、例えば下村治さんとか何人かブレインの方がおられたが、大平蔵相の場合は、そういうアドバイスをされた人はいたのでしょうか。

小 粥 例えば最後まで身近におられた方では、新井俊三さんとか橋本清さんなどがおられますが、池田さんにおける下村さんのような非常にはつきりした特定の経済顧問的な人はいなかったと思います。しかし、東京商大（一橋大）における交友、あるいは経済界の人たちとの幅広いお付き合いの中で、大平さんの民間活力が大事だ、政府の役割はできるだけ限られたもので然るべきだという考え、それから財政は本来は均衡財政であるべきで、借金してでもというのは、家計においても国においても本来はやるべきではない、という思想は自ずから作り上げられてきたものだと思いますね。そして、その思想は、大平さんの人間的な資質の上に、次第にご自分で練り上げて行かれたものではないかという感じがします。

——総理大臣になられた後、政策研究グループをつくられて、環太平洋連帯構想をはじめ九つの構

想を、大蔵省の長富（祐一郎）さんが事務方になって打ち出すわけですが、いわゆる経済とか財政についてのグループはないのですね。

小粥 そうですね。そういえばあの中には田園都市構想グループというのがありまして、梅棹忠夫さんが座長でしたが、私もたまたまそこへ参加させていただいて、お陰でいろいろな方々のお付き合いが広がりました。とにかくあれは大平さんがご自分でいろいろ構想を持っておられながら、自分で全部やるというよりも、できるだけ広く人の話を聞こう人の知恵を集めよう、また自分だけで考えられることは所詮、知れているんだという気持からですね。テーマはもちろん大平さんが関心を持っておられるものでしたが、むしろ経済、財政以外の分野に目を向け大平さんからこういうことで人を集めてくれということ森田さん、長富君がいろいろ相談して人選し、スタートしたものだと思いません。あの方式は、その後、中曽根（康弘）内閣が引き継いだ感じで、それぞれのグループでたいへん勉強してもらったと思います。大平さん自身、決してお座なりではなくて、非常に忙しいのに、いろいろな研究会に出て話を聞くのを本当に楽しみにされていましたね。普通は審議会をつくっても総理はお忙しいし、報告書を持って行っても、後で読んでおくと言って、ちつとも具体化されないということが間々あるものですが、大平さんの場合、ああいう研究会で各分野のいろいろな考え方の人の話を聞くこと自体を、たいへん楽しみにされていました。おそらく、途中で倒れられるということがなれば、あの研究会の提言を大平さんは自分のものにした上で、できるだけ活かして行きたいと思っておられたに違いありません。

——小粥さんは、大蔵事務次官、公正取引委員会委員長、日本開発銀行総裁をへて、現在、日本政

策投資銀行総裁という経歴を歩まれたわけですが、そういう中で、フツと大平流の何かを考えられることがありますか。

「自らに厳しく他人には寛容」が大平流

小粥 ありますね。何よりもまず人間として、まことに敬愛すべき、そして懐かしいお人であったという事です。それから、大平さんのご家庭、あるいは私の家内も含めて、大平邸に何となく集まっていた人たちの雰囲気というのは、たいへんファミリーな温かさがあって良かったですね。また仕える立場からすると、本当に有難い人でしたね。これは自分の恥を話すようですが、こんなこともありました。国会開会中のこと、秘書官として随行していて、大平大臣が本会議場に入ってから出られるまで予定として三時間ほど待っている時に、ついちょっとだけとばかり、囲碁が好きな警護官と私が碁を打っているうちに、何と予定時間より一五分も早く大臣が議場から出られて、独りで車に乗って大蔵省へ帰ってしまったのです。慌てて部屋に戻って、これは誠にさと覚悟して私は恐る恐る「大臣、申しわけありません」と申し上げたら、「君ら、なにしておった」と、それだけで終わりでした。本当に冷汗をかきましたが、大平さんの大きさを実感いたしました。思い出すことはまだいろいろありますが、終始「自らに厳しく、他人には寛容であれ」、これが大平流だった、とあらためて思います。

——小粥さんは、中曽根総理にまた頼まれて秘書官をされる、福田総理の秘書官もちょっとされたことがあるそうですが……。

小粥 三木内閣総辞職の後、福田内閣が五一年一月二月に発足するわけですが、その時の総理秘書官として、福田さんの蔵相、経企庁長官時代に秘書官をつとめた保田博君が指名されました。ところが彼は、当時、厚生労働担当の主計官をされていて、予算づくりの真最中なので直ぐに代えることができない。それで臨時の代役として大平蔵相秘書官を終わらせたばかりの私が、ちょうど一ヵ月間、内閣審議官という肩書で、福田総理秘書官を務めることになりました。当時、政治部記者の方々から『大福蜜月時代』ならではの産物だね』と言われましたよ。ですから私は、因らずも大平、福田、中曾根の三君に仕えるという、珍しい記録の持主なのです。このお三方は、それぞれ派閥も異り、タイプも全く違いますけれども、しかし、いずれも本当の大物政治家でしたから、私は実に仕合せであったと思っています。しかし、もともと政治の世界のことが全く分からなかった私にとって、最初の秘書官経験であっただけに、大平蔵相時代はとりわけ鮮烈な印象を持っております。大平さんが亡くなられてから二〇年になりますが、現在の異常な赤字財政をご覧になったら何と言われるか、財政家大平さんがあらためて顧みられて然るべきだと思います。

(平成二二年一月二日 日本政策投資銀行総裁室で取材)

小粥正巳(こがゆ・まさみ) 一九三一年、東京都生まれ。五六年東大法学部卒  
と同時に大蔵省に入省、七三年東京国税局間税部長、七四年七月、大平正芳大蔵大臣秘書官、七六年福田内閣審議官、七七年証券局資本市場課長、七八年主計馬主計官、八二年近畿財務局長、同年一月、中曾根内閣総理大臣秘書官、八五年主計局次長、八八年主計局長、九〇年大蔵事務次官をへて、九一年退官。九二年公正取引委員会委員長、九八年日本開発銀行総裁、九九年局から日本政策投資銀行総裁を務める。